

軍事史学

第55巻 第4号

巻頭言

「広義の軍事史」の視点から

原田敬一

軍事に関する研究である軍事学は、一九四五年までの日本では、軍人など軍事専門家の独壇場だった。欧米では民間の軍事評論家が活躍していたと思われるが、ここでは深入りほしめない。プロイセンのクラウゼヴィッツやアメリカのマハンなどの著作は、同時代の日本でも翻訳され、広がっている。日露戦後に、櫻井忠温『肉弾——旅順実戦記——』や水野廣徳『此一戦』が刊行され、ベストセラーになったが、いずれも従軍した将校・士官だった。

軍事学では範囲が広いので、軍事史に絞って述べたい。日清戦争も日露戦争も、川崎紫山や菅谷与吉など、文筆家による戦史物が出版されているが、内容は『日清戦争実記』や新聞などが報道したものに依拠しており、迫真性という点では、櫻井や水野にかなわなかった。また軍事機密・国防機密という壁は、日中全面戦争以後の帝国議会でも突破できず、そのような状況では、広く軍事について議論・研究・執筆ができるものではなかった。情報公開と自主的な議論・研究は両輪である。

一九四五年の敗戦と日本国憲法の制定は、そうした壁を壊したが、軍事史研究は歴史学界に大きな位置を占めることはなかった。その中でも軍事史学会はしだいに影響力を高めたが、歴史学界とのつながりは弱かった。私が参加したのは二〇年ほど前の仙台大会だが、陸上自衛隊の駐屯地を会場とし、講堂の後ろ半分には若い自衛官がズラッと並んで聴講していたのに驚いた。一九七〇年代以降には、戦前の軍事史料が防衛研究所戦史室で公開されたし、現代のネット時代には、防衛研究所の発表雑誌やニューズレターなどもネットで広く公開されて、共通の土台がくられ、議論がやりやすくなっている。

軍事史研究は二十世紀末から大きく変わったと捉えられている。欧米では一九六〇年代にすでに軍隊社会史など「広義の軍事史」へと進んでいた〔阪口修平編『歴史と軍隊——軍事史の新しい地平——』（創元社、二〇一〇年）〕。戦前のような軍事専門家による軍事学や戦史研究を超えて、軍隊や戦争そのもの、または軍隊と社会の関わりを広く究明することを「広義の軍事史」と呼んでいる。都市や農村などを政治・経済史だけではなく、修平氏編の同書を、日本史では『地域のなかの軍事史』では重視される。ヨーロッパ史では阪口修平氏編の同書を、日本史では『地域のなかの軍事史』全九巻（吉川弘文館、二〇一四〜一五年）を実績として挙げたい。両者の執筆者は、既に『軍事史学』にも論文を発表しているし、『軍事史学』の特集も、ジェンダーなど新しい分野に斬りこんでいる。こうした試みが、現代社会の中で軍事問題を考えさせる議論につながるが期待される。

（佛教学名誉教授）